

レビー小体型認知症の理解とケア

北海道認知症グループホーム協会道東ブロック

〒085-0008 釧路市入江町 8 番 29 号

助成事業の概要

平成 24 年 9 月 29 日 (土) 14 時 30 分より
アクアベールにて

講演会名『レビー小体型認知症の理解とケア』

現在アルツハイマー型認知症と診断されている方の中に、多くのレビー小体型認知症の方がいると思われまます。グループホームの職員がこの研修を通して、疾患別の介護を行えるようになり、利用者のより良い生活と家族への安心が提供できるようになることを目的として、今回はレビー小体型認知症の発見者として国際的に知られている、小阪憲司医師とレビー小体型認知症家族の会の副会長であり、北海道認知症グループホーム協会の前会長である武田純子氏を迎えて、レビー小体型認知症の臨床と介護というテーマで講演して頂きました。参加者はグループホーム関係者が約 100 名、他福祉施設関係者が約 50 名参加されました。また十勝ブロックの方も参加してくれました。当初はオホーツクブロックの方も参加する予定でしたが、小阪先生が北見でも講演することになり、北見で参加することになりました。私たちにとっては、市役所や包括支援センターの方も参加して頂き、とても励みになりました。特に認知症専門の医師が参加してくれ、質疑応答の時間で発言して頂き、釧路にもこのような医師がいてくれる存在を知り、とてもうれしく思いました。

事業の成果

得られた成果としては、レビー小体型認知症は

脳血管型認知症やアルツハイマー型認知症に比べて、発見されたのが新しく、正確で詳しい知識を持っている方は非常に限られておりました。この講演を通して、レビー小体型認知症の正しい理解と適切なケア方法を皆さんが学べた事が最大の成果だと思えます。

参加者がびっくりしたのは、パーキンソン病とレビー小体型認知症は兄弟みたいな、同種類の病気だという事でした。ある有名な認知症専門の医師の講演で、レビー小体型認知症には必ずパーキンソン症状が伴うという事は聞いた事が有ります。しかし小阪先生によると、レビー小体が主に大脳皮質に広く現れるとレビー小体型認知症であり、レビー小体が主に脳幹に現れるとパーキンソン病になるとの事でした。目から鱗とはこのことでした。実際にグループホームの多くの利用者にパーキンソン症状が現れており、かなりの数の利用者がレビー小体型だろうと思われまます。また驚いたのは、初期には必ずしも、認知症が伴わない場合も多いということです。パーキンソン症状の他に、特長としては、うつ症状、幻視、認知障害、認知の変動、自立神経症状、薬に対する過敏性、レム睡眠行動障害が有ります。各グループホームの職員は、あの方もレビー小体型認知症かもしれない、という声があちこちで聞こえました。こうして正しい知識を得た後に、武田氏の講演が始まりました。武田氏は、自分の親もレビー小体型認知症であり、自分のホーム（5 ユニットのグループホーム）でも、後で考えれば 30 人近くの利用者がレビー小体型認知症であろうと言われまました。それだけに人数を身近で介護され、実に事例

が豊富でした。一番なるほどと思った事は、各ホームもアルツハイマーの利用者が一番多いのですが、アルツハイマーの利用者と同じ対応をしていたら、大変なことになる事でした。アルツハイマーの方は記憶障害が顕著に現れます。その場で、介護員が安心してもらう為に言った言葉も、その後忘れることはあります。しかしレビー小体型の方は確実に覚えていて、例えばその言葉が不適切だった場合は、その介護員を無視するようになり、不穏になることもあるそうです。「〇〇さんには見えるのですね、私は見えないの、どこにいるの？」と聞いたりして、その部分を何かで拭いたりすると消えるようなことが多く、そのうちに自分しか見えないことに気が付いたり、スタッフが対応することによって幻視が消えることもあり、スタッフに見えるものを追い払ってくれるよう頼むようになる事もあるそうです。又レビー小体の方には抗精神薬が過剰に反応するので、薬には特に注意する必要があるとの事を学びました。

又、参加者アンケートでは、レビー小体型認知症が理解できた、講師自身の介護現場での具体的な事例により更にわかりやすく、又受講したい、病気を理解したことで、自施設の利用者を別の視点から観察し、医師に相談する必要がある等の意見がありました。この研修を受けた職員は、確実にレビー小体型の利用者に対して今までと違った対応が出来るようになるかと確信しています。

成果の広報、公表

北海道認知症グループホーム協会道東ブロックの広報誌、虹色めがね通信（年4回発行現在30号まで発行）に今回の講演内容を記事にします。虹色めがね通信は巻頭言として、行政役人から釧路地域の福祉関係者、病院関係者等に毎回お願いしており、その他は道東ブロックの研修記事、交流記事、グループホーム紹介、今後の行事等を掲

載しております。広報誌はグループホーム会員41か所、6包括支援センター、市役所、支庁に配信、配布します。又北海道認知症グループホーム協会のホームページに掲載いたします。北海道のグループホーム関係者は勿論、介護新聞社等の福祉関係者、一般市民もアクセスしております。特に道東ブロックのコーナーには空室状況を掲載しておりますので、たくさんのアクセスがございます。又今回の研修は日本社会福祉弘済会の24年度助成事業の補助金により開催できた事を記事の中で公表いたします。

今後の展開

成果は釧路のグループホームの職員を中心にレビー小体型認知症の正しい理解と介護方法を知ることができたことです。これらの知識とケア技術を更にレベルアップする為に今後はレビー小体型認知症に関わらず認知症疾患別対応方法を学びたいと思っています。又今回のアンケートでは武田先生の講演を又聞きたい。時間が足りなかったという意見が多く、再度お呼びしたいと考えております。課題としては小阪先生の講演は先生自身が医師の為か、介護職員にとって少し難しかったという方が多く、講演前に先生の著書を読んでおくように働きかける事も必要だったと感じました。